



ボクノウチ

ミュー

「食べないんですか？」

返事が思いつかなくて黙っていると、克蘭カインが頬杖をついて小首を傾げた。肘の下のテーブルクロスに刻まれた複雑な幾何学模様は花の蔓。

「お腹は空いているでしょう」

そのはずなんだけど。でも、あれほど煩かった腹の虫はいつからか沈黙している。気が遠くなるほど長いテーブル。布張りのクッションが上等の椅子に、大理石の床。高い天井にぶら下がったシャンデリアの、刃物のような鋭いガラス。壁面を覆う繊細な模様。僕が生まれるよりずっと前からそこにあるような、飴色の調度品が壁際に佇んでいる。おとぎ話か、映画か、タイムスリップ。形容が非現実的な室内で、着替えた服の滑らかな布地を膝の上の手で握って離すを繰り返す。手汗が白い絹に浸透し、ささくれで糸が引つ掛かりほつれた。あ、と思うが、どうせこの一回しか着ない服だ。すぐ脱ぐんだし。多分その後捨てられる。

克蘭カインは、テーブルの向かい合う短辺から僕を見ている。獲物を狙う肉食獣のような目で。

今、僕が吐いた溜息は聞こえないだろうが伝わっているだろう。今日は、二人だけの日か。たくさんいても疲れるが、二人きりも気が重い。特に、こういう趣向の日は僕は目の前に広がる出来立てのフルコースを眺める。全て運ばれ、満員電車の中のように窮屈に並ぶ皿の間には菱形の隙間。香気の強いスープに、絵画のように計算された配置のオードブル。柔らかそうな魚の白身。溶けかけたミントグリーンのソルベ。湯気がもうもうと立ち昇るソース。控えめな暖色の照明にてらてら光る、断面が赤いに違いないであろう肉の塊。皿の群れ。角の近くで草食動物の住処のように小さくなっているサラダと、すっかり表面の乾いたパン。角の丸くなったバター。

食べれば美味しいに違いない。でも、身体が受け付けない。食べた後を想像して空っぽの胃がぎりぎり痛む。

「冷めないうちに、どうぞ。兄さん」

満面の笑み。何も知らない人間が見たら、善良で柔和で人好きのする微笑みかし

れない。でも、僕は知っている。張り付いた笑みの薄皮一枚の下に滾る憎悪を。

「いただきます」

「はい、召し上がれ」

コーヒーの前の焼き菓子を掴み、僕の弟は僕がナイフとフォークを取り上げる様をじっと見る。皿に接してカタカタ鳴って、みつともないことこの上ない。それを可笑しそうに眺めている。

この手の震えはいつからだったか。

「うあ…あ…っ」

臍の上の圧迫感に耐えかねて身を振ると、側頭部をステッキの柄で吹っ飛ばされた。こんな所も、嫌になるほどそっくりだ。裏返された体の背中をつつ、と杖の先端が辿った。

「腰を上げて」

言われた通りにしようとするのだが、首輪を後ろから引つ張られて頭が上がって腰が落ちる。じゃら、と鎖が後ろで鳴った。あいつの足が背中を踏む。一回目はゆつくり。二回目は音がするくらい。

内臓が重く痛い。消化途中の胃の内容物がひっくり返り、吐き出しそうになる。

「ほら。苦しいでしょう。出したら楽になりますよ」

上だろうか。下だろうか。どっちの話だろう。

上等な床だ、と頬と背を撫でる絨毯の柔らかさに感想を抱く。横顔の鼻先まで沈む毛足の長い、柔らかい絨毯の感触。吸水力は高そうだ。この上にものを溢せば、僕が弁償するわけでもないがいたたまれない心地になるに違いない。誰かの手仕事で長い時間をかけて作り上げられた美しい織物が、汚い人間の汚い行為によって汚されるというのは嫌なものだ。それを知っていて、克蘭カインはいつも一点ものの、手の込んだ布地の上で僕を犯す。絨毯、ソファ、ベッドカバー、それにドレス。この絨毯は面積といい刺繍の見事さといい、相当高価な代物だろう。

腹が空いている時の方が、こういう行為は耐え易い。どんなにされても、痛みの近

くにあるぞわりとした感触を身体が鋭敏に都合よく快感に変換してくれるから。だからこいつが好きな、腹一杯に食べ物を詰め込んでするセックスは辛い。体の中が気持ち悪い。腹が苦しい。痛みが遠い。

四つん這いになった体勢でバシン、と背中を打たれるが痛くない。それより、後ろに飲み込んだ違和感が勝った。上の口にも下の口にも、モノを入れるのが好きなやつ。そういや、服はどこにいったつけ。さつきまで着ていた白いやつ。まあいいか。汚さないならその方が。もう汗と血が肌を濡らしているし、この先いろいろまき散らすだろうから。

「ひっ…ウ…うっ…」

ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴ、とナカの嫌な振動で口内に胃液の味が広がった。肉の臭みに涙が出る。早く終わらないか。

「はあ…っ…！ あ…う…」

目を固く閉じて、必死に刺激を追おうと集中する。どうせ辛いなら、少しでも気持ちよくなりたい。たぶたぶの胃が、噛み砕かれて消化の真っ最中に至る食物の重さが、

それを邪魔する。

ぐりん。

急に体勢を変えられて、眩暈が視界を真つ暗にする。背中が床。口は上。必死で息を吸おうと思うが、素肌に食い込むベルトがぎりぎり締まって、胃の出口をステツキの先端での確に押される。気持ち悪い。吐きそうだ。せり上がってきたものを何度か唾で飲み込む。

「ふ…う、ぐ…」

「浅ましいですね」

肛門に捻じ込まれた玩具がずぼりと一気に抜かれた。それをすぐ口に突っ込まれる。ぐいぐい咽喉を責められて、歯がシリコンに食い込んだ。舌に苦いのは自分の腸液の味。仰向けの膝が持ち上げられて開かれた。

「浅ましい。まるで犬だ」

浅ましい、か。確かに。標本のように開かれて腹と両手を縛られて、口にはさつきまで排泄器官を掻きまわしていたネオンピンクの毒々しいパイプを入れて、それで勃

がん、がん、と突かれた後ろがぎゅうと締まった。下腹にぼたぼた落ちる自分の精液。

繋がったまま、ぐい、と押される心臓の下。身体が跳ねて、中が暴れる。食道を逆流するフルコースの成れの果てと、出した先から搾り取るようにあいつのペニスを締める肛門管。

貪るように喰い漁って、吐いて、また喰って。本当に犬だ。

「…ふ、…うっ…ぐ…うっ…う！」

豪華な絨毯にまき散った嘔吐物。髪を掴まれその上に顔を埋められる。酸っぱい体液に混ざる、油と肉と乳の臭い。嘔吐づくると黄色い胃液がまだ出た。

「掃除は自分でしてください。口でね」

克蘭カインの冷笑。ずるりと抜かれた先を髪で拭う。これで髪も顔も体も、全部汚い。

それでも、今日はマシな方か。

三角関数 May

「甘」

「そりゃね」

「これ、なんだっけ。大きい砂糖」

「ザラメ？」

「そう。よく食べられるな。胸やけする」

「いらないの？　ここが美味しいのに」

「やる」

「どうしたの？」

「いや。ちゃんとコップ、二つ出したんだなって思ってたさ」

「湯呑みだよ」

「そうそれ」

「流石に、そこまで下心中心に生きてないよ」
「そっか」

「お前の部屋さ」

「うん」

「いいな。なんか」

「何が？」

「落ち着く」

「…ずっといたら？」

「はは、帰らないと」

「明日も来たら？」

「それは駄目だ」

「どうして？」

「さあ、なんだろうな」

「迷惑？　僕が嫌い？」

「…嫌いじゃないさ。迷惑は、有難迷惑ってやつかな」

「あんまり、僕に関わらない方がいい」

「どうして？」

「お前のことが、嫌いじゃないから」

嫌いじゃない、か。

「好きってこと？」

「どうしてそうなる」

隣り合った同じ模様の湯呑み。一つを手に取り温くなったお茶を飲み干す。
わざと間違えたって、気づいたかな。

二十三時の覚醒 Jun

ああ、こいつか。

寝しなに目を覚ますなんてのはしょっちゅうだ。それは、僕の寝つきが悪いとか、腹の虫が煩いとか、広すぎる庭の雨の日の蛙の大合唱のせいじゃない。もっと単純な理由だ。

べろり。

背骨を辿る生温かい舌の感触に肌が粟立つ。朝になったらまたシャワーか。面倒だが毎日のことだ、と今更ながらため息を吐く。

僕の部屋には鍵がない。まあ、日本の住宅なら。襖とか障子とかそんな扉なら、自然なことだ。でも、ここは日本家屋ではない。西洋造りの屋敷の一室に元々あった鍵をわざわざ取り外した、客間の一つ。そこに僕は、三年近く棲んでいる。住んでいる、じゃなくて棲んでいる、という表現が相応しいだろう。だって、僕は人間としてここにいるわけじゃないんだから。

ぢう。

この、やたら体中を舐め回す奴は庭師だったかな。いや、コックだったか。こんなに暗いと顔も分らない。肌が覚えた手の形が、いつか見た手に重なった。確か晴れた春の庭。だから今、庭師と間違えた。そう。薔薇が咲き頃で、木製の椅子は日を浴びぬくもりがあった。真つ白なテーブルクロスに並んだ繊細な意匠のティーセット。盗み見た長いカナリアイエローの髪の毛の光。あの人は僕を見て、薔薇は赤くて、菓子も紅茶も香り立って。暖かい場所で、綺麗な場所だったのに。僕はふと視界に入った紅茶を注ぐ手の形に寒気がして、菓子の種類を説明する口の舌に鳥肌が立った。こいつの手と舌を知っている、と気付いて。

嫌になる。こんな屑野郎でも、仕事をして、美しいものを生み出している。薄桃の薔薇が描かれたアイシングクッキーを食べた時、あの人は春の風より優しく笑った。僕は大好きな笑顔を見て、それを作り出した男の手が僕に何をするか思い出し紅茶を吐き出しそうだった。

ちゅ、ちゅ。ころ。

いつも思うが、変な奴。早く突っ込んで終わりにしたらいいものを、こいつは臍から乳首から指の隙間から、僕の身体にチヨコレートが塗ってあるかのように隈なく舐めて吸い付くんだ。時々噛まれるが、痛くもなんともない。前に眼球を舐められた時には流石に声を上げたけれど、それ以外は別に。痛くもないからうとうとして、いよいよ寝ようか、と思う頃、フェラチオが始まる。僕が射精するまでやめない。ああ、あと出したらこいつ…それを飲むもんだから。最初はうわ、と思ったけどもう慣れた。その割に挿れた後はすぐ。僕の方の準備は、あちこち触られて生理的に下は疼いてるし、こいつが一人目ってわけじゃないから。何人目か分からない交合は正常位ものの二、三分で終わってしまう。

じゅ。じゅ。じゅぶ。ちう。

スプリングの深いベッドで皺だらけのシーツの湿り気を肌を感じ。天井の模様を辿りつつ、陰茎を扱かれ吸われて熱い吐息を吐き出しつつも、こんなことがふと浮かぶ。明日、どんな顔して学校に行こうかなんて。

2 ケツ
July

擦れ違う人が、時々僕らを見る。景色を置き去りにして、車輪は回り風が発生する。なんだ、結構簡単だ。小さい頃は自転車なんて買う余裕が家計には無かったから、初めての自転車だ。あと、初めての二人乗り。暗くなってきた。ライトを点灯する。

「——か」

何か言ってる。よく聞こえない。

「なに？」

大きな声で半分振り向く。油断してちよつと揺れた。腰に回った腕にぎゅう、と力が入る。背中にお腹が密着して、体温を感じる。まさかこんな体勢になるとは。嬉しいような、複雑な心境だ。顔が見えなくて良かった。きつと表情は緩んでるし、頬もどこも文句なく言い逃れも出来ず赤いはず。

「どこまで、いくんだ？」

耳のすぐそこ。バランスを崩さぬよう、ぐ、とペダルを強く踏み込む。

「もうすぐ。あと五分くらい」

「なにをしに、いくんだ？」

「君と一緒に見たくて」

「なにを？」

「着いたら分かるよ」

鼻が鳴って、耳を引っ張られた。耳が赤いのばれてるのか。

「きれい……」

夕暮れも届かない木々の中で、光の群れを瞳に映してスレインは言った。

「よかった」

行き交う蛍。

「こんな所があつたんだ」

「昔、来たことがあつて。その時より増えたかな」

「界塚」

「何？」

「お前、どうして僕に関わるんだ？」

「好きなんだ。僕。スレインが」

「よく分からない」

「なんで？」

「お前が好きになる理由が見当たらない」

「僕は…汚いから。触ると汚れる。僕と一緒にいると、お前は駄目になると思う」

「僕はそうは思わない」

「ほら、あれ見て」

「蛍の光は求愛信号なんだ」

「知ってる」

「交尾は一番中続くんだって。長いよね」

「何が言いたい？」

「それで、死んじやうんだな、と思つて。でもさ、ああやって飛んでるときにそこま
で考えて光つてないよ」

「生き物は単純だから好きなんだ」

「わけが分からない」

「スレイン、見て」

ぶわあああ。

「すご……」

「こんな感じだよ」

何、と聞こうとして目が合った。

「好きなところ。君の」

横倒しの自転車。

「お前は、それを聞かない」

「だから、嫌いじゃないよ」

ガシャン。

この音は嫌いだ。

「手。縛っとけ」

ビ、と勢いのよい粘着のりを剥がす音。ガムテープを二つ。用意のいいことだ。

「口塞げ」

ガシャン、ガシャン、ガ、ガ、ガシャン。

一、二、三、四、五、六。

六人か。

こいつら、昨日はいなかったな。

一限目の屋上。地面のコンクリに打ち付けた左肩が痛い。両手を頭の上でぐるぐる巻きにされて、そこを二人がかりで押さえつけられる。腹に馬乗りになった同級生の股間が目に残まりうんざりする。朝から元気な奴ら。

「っは、くくくっ!!」

「次は俺だ」

「早くしろよ。後がつつかえてるんだから」

「あと十五分でチャイムだ」

フェンス越しに見える空は、雲一つない青天だ。

「スレイン」

この声に背が跳ね冷汗が伝うのは、きつともう直せない習性だろう。

「はい、お父さん」

帰りが遅くなった。まだ起きているとは思っていたけれど、僕の部屋にいるとは思わなかった。電気もつけないで。

鞆を床に置いた。靴を脱いで壁に踵を合わせて揃える。制服のジャケットを脱いで畳む。いつもなら、このままバスルームに行く。この人が来るのはもっと後。風呂で体の汚れを落として温まって、髪を乾かしてベッドに潜り込んでから。多分、誰かが見てるか、窺ってるんだろう。布団が僕の体温と同じに均されてから、扉が開いてコン、コン、と杖が床を撫でる音がするのにな。

帰宅には遅い時間とはいえ、まだ日を跨いでもいい。ここで待ってた、というのは変な感じだ。どうしたんだろう。溜まってるのかな。

「遅かったな。どこに行っていた？」

今まで、そんなことを聞かれたことは無い。

「海に」

嘘をついた。

「どうして、海に行く？」

苛ついているのが、ステッキを握った手の力加減で分かる。

「海を見るのに、理由がいりますか」

これは本音。本当なら、毎日だつて見に行きたい。青い空。青い海。夏の風。蝉の声。アイスの赤と緑と当たり棒。夏は好きだ。夏の海は。今は秋なんだけど。

カン、と強く杖先が床を打ち鳴らし、大股で近寄つてきた。すぐ前に立つと、僕よりずっと背が高い。大人の男の大きな手に、顎を掴まれて持ち上げられる。怒らせたか。でも、この人はいつだつて怒つてるんだから、僕が何を言ってもいいと思う。

「この傷は何だ」

ぐい、ぐい、と力技で顔をあっちこっちに向けられる。爪先立ちの足がしびれる。

「転びました」

パン、と平手。吹っ飛ばされて、翻筋斗打って肩から床に転がる。

「どこの馬の骨を誑かして来た」

あ、一応そういうの気にするんだ。知らないか、関心がないと思っていた。身を起こそうとするが思ったより痛い。上手く肘がつかなくて、額が床にぶつかった。

「返事をしろ」

胸倉を掴んだ手は、やっぱり大きい。鼻先の瞳の色は冷色なのに、こんなに熱そうに見えるのは不思議だ。目尻の皺が無ければ、あいつによく似てる。この目の色も、形も、そこに映り込んだ僕の顔も。

「これは、転んだんです。よそ見をしていたら、路上に並んでいたオレンジ色の自転車にぶつかって」

嘘ばかり。本当なのは、自転車の色だけ。

まだ残ってる。まだここにある。荷台の硬さと夜風の温度。あと、匂い。花火の焦げた煙。

煙の向こうに見える。消える火花の綴った二文字。円。三角。あと四角。それにその声。あいつの。『そう。そういう所』僕は笑った。お前も笑った。

綺麗なものを、まだ綺麗だと思える。僕は。

「もういい」

後頭部が二度跳ねた。脳震盪で意識が遠のく。このまま氣を失ってしまいたいと思つたが、きつと許してもらえない。がつ、と上下の齒の間に冷たく大きな硬い石。擦れて切れた頬肉の内側がじんとする。多分切れて、血が出る。親子そろつて、人の口にモノ突つ込むのが好きな奴ら。

シャツを左右に引かれ、釦がコン、コン、と床に落ちた。また釦が少なくなつた。冬だつていうのに。

「汚いな。どこで付けた」

胸の上を、腹の上を、肩を、首を、肉厚の手が撫で、押し、指で押す。何日も前から色が違う肌の下がぐにやりと凹んだ。もちろん痛い、それよりも圧迫されて苦しい。しかし今更、何を怒っているんだろう。こんな傷、いつだつてついてるじゃない

か。あんたがつけるのも、他のやつらがつけたのも。今日ついた傷は一つもない。残ってるのは季節外れの花火の匂いだけだ。

「答えろ」

そう思うんならこの邪魔な棒を退けろ。今までそんなこと、一回だって聞いたこともないくせに。傷だって痣だって首や手首の痕だって、今まで見て見ぬふりをしてきたくせに。あんたが来ない夜に、あんたの家来が列を作って犯しに来るのを知ってるだろうが。

僕の、何を知りたいんだ。あんたは。

血の味がするステッキ握りがずる、と引き出され僕は咳き込んだ。

「よもや、私の息子に手を出してはいないだろうな」

「…はは」

こんなに可笑しい冗談は初めて聞いた。大笑いしたいが、噎せて途中で咳き込んだ。声を張り上げて、高笑いしてやりたい。本当可笑しい。そうか。それを知らないとは、知らなかった。見上げた顔は無様に歪んでいる。笑っていると拳が飛んできた。痛い

けど、本当可笑しい。あんた、本当にしようもないな。

あんたは僕を殴って、ひれ伏させる。

あんたの子どもは僕の中身を掻きだす。

あんたの家来は僕を舐めて齧る。

僕の器はだんだんひび割れて、僕の中身はだんだん空っぽになって、僕の蓋は穴が開いて碎けて割れてもう閉じない。

『三回目』『何が？』

なんでこんな時に、あいつの顔が浮かぶんだ。

『…血が出る。絆創膏くらい貼ろう』

あんな傷、舐め解きや治るって言ったのに。ただ、肘の外側は自分で舐められはしないけれど。追及されたら面倒だと右腕を伸ばした。

『僕は好きって言いたいだけだから、うん、って言ったらいいんですよ』

変なの。お前本当、もう何回目だ？　好き、好き、好き、好きって。好きってどんな気持ちなんだよ。

『まだ好きを満タンにしている途中なので、分かりません』

お前はそう言ったけれど。何度も好きって。僕の器を満たそうとするかのように、繰り返し飽きもせずそう言うけれど。こんな壊れた人間は、もう満タンになんてならないよ。中身だつてもうなくて。お前を満タンにすることなんてもうできない。

『カモメは夏の鳥で、ウミネコは冬の鳥だよ』

空の青。海の青。あの時お前がいなければ、きっと僕はその青にこの体を沈めてた。冬の夜道。あの時、名前くらい聞いとときや良かった。それなら、お前を探したかもしれない。こんなになつてしまう前に。

「僕を、どうしますか」

どう聞こえたか。そう思う前に横面に衝撃が飛んできた。床には血痕。この床、僕が掃除するのかな。

「立て」

腕を掴まれ放られる。予想した床との接触は無かった。うつ伏せで僕の手が掴んだのはベッドのシーツだ。身を起こそうとすると、背中に乗られた。襟首のシャツを力

任せに引つpegされて、もがくとそれで腕を縛られた。立てと言ったり縛ったり。我儘な男だ。性急に降ろされたズボンの下、尻の間を広げる両手にげんなりしつつ、僕は枕の端を噛み締めた。

『お父さんは死んだの？』

お父さんの手って、どんな手だったっけ。

バン、バン、バン、…バン！

「ツア、…はあつ、が、ア…、ぐ、うあつ…！」

背中がじくじくする。焼け爛れたみたいに皮の間隔がでろでろだ。もう何回打たれたろう。皮は破れているだろう。シャツにまた血が付く。それに、しばらく凭れられない。鞭で打たれると三日は熱が引かないんだ。服を着るだけでひりひりして、蚯蚓がのたうち回ったように腫れあがった皮膚は椅子や壁を拒絶する。

「どうした。何か言いたくなったか」

強く押し付けられて、奥が破れて体が串刺しになったかと思った。痛い。すごく。いくら慣れていても、身体の痛みは耐えがたい。鞭うたれた背中も、強く縛られた手も足も、後孔を抜き差しあいつの欲望も。中が切れたかもしれない。痛いところしかないから、気のせいかもしれないが。

「…はあ、ア…」

バン、バン、バン！

「あああつ…！ か、は…あ、ああ、あ、ああつ…！」

痛い。痛い。酸を浴びたらこんな感じだろうか。理科準備室の暗幕の中、鍵のかかった薬品庫の茶色い試薬瓶がふと浮かぶ。これくらいの痛みなら、あれを被ると手つ取り早いかもしれない。顔も体も分からなくなつて、光の届かない狭い場所でひっそり死んでいくのは、いいかもしれない。

シャツで雁字搦めにされた両手が頭上にある。うつ伏せで四つん這いで、背中に鞭を受けるのは自分が獣になったかのような心地になる。けどもの。弱いものは、強いものに蹂躪される。初めてこの部屋に、この男が来た時のこと。僕は今よりずっと弱

くて、馬鹿で、間抜けで、呆れるくらい純情で。でもまだ、自分を人だと思っていた。今よりずっと、生にも死にも近かった。

「つく…は…」

激しく腰を打ち付けられて、足が攣る。激痛が奔り、意思の通りに動かない。もういつそ気を失ってしまいたい、その試みは頭部への衝撃で毎回失敗する。

ガン。

「があっ…」

頭から垂れる血で、目が良く見えない。痛い。どこもかしこも痛い、ナカがすごく。これ、奥は今どうなってるんだろう。血が出るだろうか。だとしたら、シャツだけじゃなくて下着も汚してしまう。明日、学校に行くのは止めた方がいいかもしれない。血の滲んだシャツと血で汚れた下着と、血の臭いと。それを纏ってあいつに会うのは気が重い。きつと感づくに違いないし、あえて聞かない。だから。もう明日は休もうか。学校。

こんなに痛くても、こんなに辛くても、身体が反応して背筋が痺れる。喉がひくつ

き、仰け反り、喘ぎを漏らす。でも、そんなのはもういいんだ。こいつしか見てないし。こいつが何を考えていても関係ない。

「っ：は、ああっ：！　く、う：」

がたがた震える足。そして腿を、力づくで開かれる。腰から下を持ち上げられて、不安定な態勢に敏感な部分が擦り上げられて、痛みが快楽にすり替わる。どろり、先からぼたぼた零れ落ちた。ぎゅうぎゅう食らいつく括約筋と、低い呻き声が耳に煩い。でも、すごく硬い。大きい。まだ。

「があっ、：あっ、アア：ッ！」

接合部の衝撃に壊れそうになりながら、攣った足をいいように揺すられながら、ふと思い至り。

「ふ、うつ：ふは、：は：、ああは、は」

僕は笑った。奴の手が尻を打つ。一度。二度。三度。四度。その度喰いちぎる様に肛門が締まり、また僕は笑った。

「貴様、何が可笑しい」

本当、可笑しい。

「…いえ。何も」

嘘ばかり。僕は、こいつの前では嘘ばかりだ。可笑しいさ。可笑しい。だって、あんたは僕を犬だと思わないと抱けないんだから。あんたの息子は、少なくとも僕を人間として犬と呼ぶ。僕を貶めたいという一心で、本当に嫌なことばかりしてくる奴だけれど。それでも、あんたよりは少しはマシだ。あいつは、僕を見ている。目をこれ以上なく見開いて。でも、あんたは。

「何が可笑しい」

「…つづ、…は。…ふふ」

見ようとしないうし、目を逸らす。可笑しい。僕があんたの目を見ても、あんたは僕から目を逸らす。ずっとそう。

「カ…ハツ…、ア、ア！」

首に。

「…カ、は、…が、あ…ア」

両手が。

「殺してほしいか」

一度離れた。苦しいけど、苦しくない。もう、眠い。これが僕の最後の言葉になるのかな。だったら。

「……ご、自由、に」

好きにしたらしい。

巻き付く。ベルト。締まる。締まる。意識が薄れる。

「……う！ ……つあ、………あ、…アア」

最期に感じるのが恐怖と快感だなんて、馬鹿げてる。でも、僕にはそれも似合ってる。ぎりぎり締まる首と穴の感触に歯が軋む。頸動脈に食い込むベルトと皮膚の境目を、無意識に手が掻き毟る。

『そう、そういうところ』

爪の間にこびり付いた血を、蚯蚓腫れの首を。隠す釦は随分前からもうない。明日、あいつはこれを見て、唇を噛んで俯くんだ。

死にたい。もう。

ベルトが緩み、呼吸が戻る。咳き込むとシーツに血が飛んだ。鉄の味がする。
バシン、バン！ 細長の合皮が背を打つ音。

「氣を失うには、まだ早い。尻を上げろ」

手足を腕がれるブリキの人形の心地で身体の軋みをやり過ぐす。痛みにも屈辱にも慣れている。大丈夫。僕はまだ、大丈夫。コレはそのうち終わる。何時になるかは分からないけれど、多分生きて起きられる。制服の釦はまた少なくなっただけれど、留められる。大丈夫。朝になったら、体を洗って服を着て、靴を履いて、家を出る。大丈夫。明日は学校に行ける。

痛みが遠のく。意識が薄れる。感じるのは瞼の熱さと痛みだけ。

「…、……、……！」

何か言ってる。聞こえない。

ブリキの人形は心が欲しい。心が無いから。心なんて壊れて、中身はもうない。それなのに。

どうして涙が出るんだろう。

タイマン November

頭の中の買い物リストに書き込んでいた思考を止め、交差点の手前で僕は足を止めた。見覚えのある白い乗用車がハザードランプを点滅させて停車し、後部座席のドアが開く。

「初めまして。界塚伊奈帆さん」

いけしゃあしゃあと。自分に向けられる頬笑みの温度は絶対零度。これは嫌だ。

「僕は、前から知っている」

「そうですね」

手招きされた。返答に興味があつたので聞いてみる。

「何の用ですか」

「話をしましょう。兄のことで」

腹が立った。すぐく。僕は脳内のメモ帳をびりびり破いて、リムジンの後部座席に乗り込んだ。

「クランカインです」

「どうして僕を？」

「兄と仲良くしてもらっているそうで。そのことでまずはお礼を」

慇懃無礼な言い方に、単刀直入に言い返す。

「馬鹿にしてる？ それとも、喧嘩を売っている？」

「違いますよ」

「これは警告です」

「僕らも色々あるんです。兄は僕の大切なものを全部奪う。多少の意趣返しはあってもいいでしょう」

「大切なもの？」

「父と恋人です」

「どういうこと？」

「あなたは見かけによらず単純ですね。どんな意味に取ってもらっても構いません」
「ただ、僕はあいつを許さない。だから苦しめる」

「初恋って、したことあります？」

「答えたくない」

「ああ。もしかして、貴方は今がその最中かな。可愛らしい。相手が何かも知らないで」

「何かって？」

顰めた顔。

「あんな汚いものに、よくも触れますね」
吐き気がした。

「降ろしてくれるかな」

「どうやって帰るつもりです？」

「歩いて」

克蘭カインはけらけら笑う。

「あいつと同じことを言う。兄もね、道も分からないのに降りるんだ。家まで送ると言うのだけれど」

「あんたと一緒にいたくないんだろう」

いつだったかの深夜、受話器の向こう、カンカン煩い踏み切り音を思い出した。
「そうでしょうね」

「たとえ薄汚れたガラクタでも、他人に横から搔つ攫われるのを黙って見てはいられない」

「触れるな。喋るな。近づくな。あいつは、僕の所有物ですよ」

「スレインは人間だ。あんたのものじゃない」

「あんたの恋人は、スレインの事が好きなんだろう？」

「何？」

「だから嫉妬してるんだ。それだけだ。僕にちよつかいを出す暇があるなら、彼女に会えばいいものを」

「そうか。あいつは、二人で会っていたのですね」

「知らなかった？」

「…ええ」

「ありがとう、恩に着ますよ」

「何する気？」

「躰をしないとね」

「このやろう、と思ったら体が先に動いていた。」

「僕をどうする？」

「殺してやりたいと思ってますよ」

ナナホシテントウ December

「それで、手を伸ばしたら逃げてしまつて」

手振りを交えて私が言うと、スレインは眉をハの字にして困つたように笑つた。アセイラム様、と仰々しく呼ばれて私は不満をほんの微か頬に込める。そんな余所余所しい呼び方つてないわ。

午後四時三十五分の、街角のコーヒーショップ。ほぼ満席の店内の窓際に向かい合つた私たちのカップの中身はもう冷たい。座つた時には、あんなに熱くて持つのも大変だつたのに。

「でも、触れないくらいが可愛いですよ。天道虫は、噛みますから」

「そうなのですか？」

昆虫の話になつたのは、最近の失敗談は何かという話になつたから。スレインは、時間割を間違えて学校に行つて、教科書がないまま授業中に指名され困つた、という話をした。他愛ないスクールライフ。私は、そういうことはないのていろいろ悩んだ

のだけれど、つい先日、この間の日曜日に庭に降りた時のことを話した。冬の庭は見
るものも少ない。退屈を感じ歩いていた私の目に、天道虫の赤が飛び込んだ。枯れ枝
の先端へよじよじと懸命に登る小さな生き物が可愛らしくて。指先を伸ばして、触れ
ようとしたのだけれど。

「昆虫ですから。敵には噛みつきます」

あんなに小さくても、噛まれたら痛いのかしら。毒があつたりするのかしら。

「スレインは、何か生き物に触ったことはありますか？」

話の先を彼に向ける。私は、どちらかと言うとスレインの話をたくさん聞きたい。

彼の話は楽しいし、綺麗だから。

「飼ったことはありませんが、猫を撫でたことがあります」

「まあ。どんな？」

「三毛猫です。学校へ行く途中で」

風景が上手く思い描けず聞いてみる。

「スレインは、学校へは歩いて行くのですか」

「歩きとバスで」

「私は、外出は車ですから。そういうものに憧れます」

窓の中から見る街の風景はとても楽しそうに見える。その中を自由に歩き回れたら。
「今日は、どうやってここに？」

「休憩の合間にこつそり、エデルリッツに連れてきてもらいました。だから、内緒なんです」

少し嘘。見つかったら、小言を言われてしまうかもしれない。

「では、あまり長い時間お引止めするわけにはいきませんね」

スレインが少し腰を浮かせたので、私は必死で次の話題を探す。せつかく会えたのに、コーヒーが冷めるまでしか一緒にいられないなんて。

「ねえ、スレイン」

「はい」

「何か、欲しいものはありますか」

間を丸くして、驚いた顔。私は、スレインのこういう顔も好き。

「え？」

「会えないかもしれませんが、クリスマスプレゼントを用意したいのです」

「僕に？」

「ええ」

「彼には？」

「内緒なの」

勢いで言ってしまったけれど、彼に見つかってはいけないことくらい、私にも分かる。ただの誤解なら解けるけれど、誤解じゃないもの。私は、スレインが好きなの。だから、内緒にしくちや。

スレインは視線を小刻みに揺らしながら考えて、しばらくして私に向き直り笑った。
「じゃあ、天道虫をください」

「天道虫？」

聞き返すと、彼の手が空中に箱の形を描く。いつも不思議なのだけれど、どうして袖の釦を留めないのかしら。

「捕まえて。籠に入れて、僕にください」

「ええ」

立ち上がる彼を声で追い掛ける。スレインは中腰で少し首を傾げた。

もう行っちゃうの？　って。そんな言葉。はしたなくて、とても言えない。

「私が天道虫を捕まえたなら、また会いましょう」

こんな約束が精一杯。天道虫なんて、本当はどうだっていいのに。スレインに、ただ会いたいだけなのに。

「はい」

空っぽの紙コップを重ね、スレインはあつさり行ってしまった。

浴槽に消す January

きゅ、きゅ。きゅ。

人差し指で何度擦つても、浴槽の内側は小気味よい音を出す。自分も家事は細やかな方だから、放りっぱなしにすることはないけれど。それでも、入浴後の湯垢落としは毎日しているとおざなりになる日もある。スポンジで撫でるだけとか、布で拭いておくだけとか。ひと月に数度くらい、晴れた日には念入りに掃除をする。それは、好きな作業だ。だから苦じやない。何より、綺麗な風呂場は気持ちがいい。

けれど。

こんな気分で湯に浸かるのは初めてかもしれない。と界塚伊奈帆は心の中で一人ごちた。

スレインは帰っていった。時刻は九時。三時間半くらい一緒にいた。スレインが風呂に入って、僕は夕飯の支度をして、二人でご飯を食べて、二人で片づけて、ソファとダイニングテーブルで思い思いに他愛のない話をして。そして、着替えて帰った。

スレインの家に。

『普段と変わりない方がいいから』

そう言つて、ぐしやぐしやの制服にもう一度袖を通して玄関から出て行つた。途中まで一緒に行く、と僕は三時間半の間に、：正確にはスレインが玄関の扉を入り出るまでの三時間二十七分の間に五回は言つた。彼の返答は『いや、いい』それだけ。鼻先で静かに閉まる扉を、僕は一度殴つた。凹まなかつたし、痛かつた。

それで、お風呂に入ろうとしたんだ。多分、湯は抜いてあると予想していた。僕だつて、そのくらいの察しはつく。スレインは、本当に驚くほど汚れていたし、いろいろと処理することもあつたと思う。僕が味噌汁と唐揚げを拵えてもスレインは風呂から出てこなくて、僕は食器から何から並べ終えて、卵焼きはやっぱりあつたかいのがいなと思つて。洗い物もある程度済ませてようやく卵を割つた。三個の卵に三杯の砂糖。めんつゆは目分量で。黄身をほぐし、泡が立たないよう早く静かに攪拌して。フライパンに油をひいて、煙が上がってタオルで荒熱を取り。普段はこんなことしないでも、今日は特別だと思つたんだ。それで卵液を薄く薄く、丁寧に巻いた。

ボウルが空になって、焼き色が着いた頃ようやくスレインがリビングに現れた。僕は緊張していた。どんな顔して出てくるんだろうと思って。僕はどんな顔をしてしまおうかと思つて。彼を傷つけてしまわないかと思つて。だけどスレインは、リラックスした表情でほんわか笑つていて、お風呂上がりでほかほかしていて、それで、『いい匂い』つて嬉しそうに言つてくれて。それで僕はほつとした。

そう、お風呂の話だ。

スレインがいなくなつた後に風呂場に行った。そこがどうなつていたかというのと、とても綺麗で。具体的に言うと、髪の毛一本も無く、泡の香りも無く、水滴の一つも無く。カラカラに乾いて湿気もないバスルームは、人の痕跡が何一つ無かつた。これには、僕も流石に驚いた。使い終わつたタオルは洗濯籠にあつたけれど、何度も湯を通して絞つて丁寧に畳まれていた。

モデルルームのように清潔な浴槽で、透明な湯を掬う。指の間から湯に落とす。ぼたぼた落ちる水の塊に映り込む自分の顔。酷い顔だ。だつて。

ぼた、と水滴。これは湯じゃない。

どうしてだろう。どうして、スレインはああなんだろう。優しくて、綺麗で、すごく好きだ。彼はいつもどこからか血を流してる。どうして、それで笑えるんだろう。僕はスレインに笑ってほしい、笑顔が見たいと思ってる。 فقط。

違うんだ。こんな、殺害現場の隠蔽工作みたいなの。殺した自分を隠して、死んだ自分を隠して、殺された自分を隠して、その繰り返し。心が。心は。スレインの心は、どこにあるんだろう。心を殺さないで生きられたら。

インターホン。どきりとする。まさかスレインが戻ってきたのか、と思ったが、すぐに「なおくん」と僕を呼ぶユキ姉の声が聞こえてきた。

予定より早い帰宅だ。追い焚きはしなくてもいいか。

ざぶ、と湯船から立ち上がり、伊奈帆は両手で顔を拭った。

麦茶の氷 Second August

「ちよ、…ちよつと待って、ちよつと待って」

「…えつと、うん。…でも。…その、…何秒くらい？」

「…ばか」

「…五秒？」

「…せめて十秒」

好きなやつとするのって、こんなに恥ずかしいんだ。

ボクノウチ

発行日 2025 年 6 月 11 日

著者 ミュー

<https://www.pixiv.net/member.php?id=955950>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
